



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第八十八号（毎月一日発行）
平成九年一月一日

北海の古平風土物語（五五）

鯨場 通行を阻んだ断崖絶壁
船に頼る日常生活

冬季の大しけで定期船が欠航の時に、急用のある人は陸路、雪の深い山道を歩いた。また、汽車で余市まで来て欠航だと知ると、悪天候の時は余市の宿に泊まるよりないが、天候さえ良ければ仲間が集まって歩くこともあった。

まったく道のない雪の中や、危険な断崖の下、狭い海岸をたどって、六時間以上の時間をかけてやっと着くのである。冬の日は短いし、二月も過ぎると沖村街道はなだれが起き、そんな危険な中をみんなで助け合いながら歩いた。

なかには山中で急に吹雪にあたり、断崖の下でなだれに巻き込まれたり、海岸で波にさら

高橋 源 五郎
われたりして、途中での遭難者が出たこともあったと聞いている。

また重病人が出た時には、戸板を担架代わりにしてそれに乗せ、屈強な男たちが集まって交代で担ぎ、余市まで運ぶようなことも度々であった。

昭和のはじめ頃、フォードの幌付きの中古車がバス代わりに走り始めたが、料金が定期船の三倍もし、時間も古平から余市まで二時間もかかった。自動車を利用するのは、生活に余裕のある限られた人たちであった。

この頃から、貨物自動車（古平町・種田商事会社）も運行されていたが、古平をはじめ先の町村では、生産物の出荷から、

食料品や生活物資の輸送のほとんどは小型の運搬船に頼っていた。これらの運搬船は、運賃がね、とか、運賃積み、と呼ばれて、ひまなく小樽港との間を往復していたがしけには弱く、やはり冬季になると欠航することが多かった。

新聞が四、五日遅れ来ることも度々で、まさに陸の孤島・積丹半島であった。従ってどうしても他地方との交流も少なく、文化や習俗の面ではその地域独特のものがあつた。

古平登龍会

五年余りの年月にわたって連載された『北海の鯨場・古平風土物語』の、書きためた原稿もあと数回で終了するとのこととで、ご愛読の皆さんにお礼を申し上げます。

故郷である古平のことについての思いを書きつづりました。が、次回からは、私どもの同期会である『古平登龍会』（古平小学校尋常科第三十三回生・大正十四年三月卒業）のことに

謹賀新年

平成九年元旦

古平町史編纂委員会

委員長 越中 庄司

八木 金蔵・丹後 藤雄

岩崎 勝博・木村 輔宏

本間 鉄男

山口 文彦・西館 昌巳

高野 俊和・宮本 正敏

水見 八郎・田岸 倉治

古平町史編纂室長

（総務課長）丹後 清市

囑託 村井 芳男

いて書く予定です。

若水の心に込み入る

八十路かな

高橋 源 吾

尋常科六年卒業生は百三十五人、高等科二年卒業生は九十六人でしたが、多くの方はすでに故人となつてしまわれました。

会長 大橋 勇治 84歳

古平町大字本町

幹事長 高橋 源 吾 85歳

小樽市オタモイ

顧問 千葉 信夫 92歳

札幌市南区石山 茶

※ 四月号から掲載の予定です。

「古平充三襲撃」

■古平空襲が本で紹介
 昨年の夏、北海道新聞社から『北海道空襲』という本が出版されました。古平にも取材に來ましたので、関係する資料をいくつか提供しました。

出来た本を改めて見たところ、こちらからの資料の間違い(※)がありました。著者の勘違いからの誤りも二、三ありました。それはともかくとして、その本を読んだ、古平

中学校の卒業生でもある札幌在住の山下信義さんから、古平にいる同級生のひとり三浦さん宅に電話があつて、「古平でクラス会をやりたいが、あの古平空襲の体験も話し合ってみよう。」ということ、私もそのクラス会に招待されることになりました。

■故郷でのクラス会
 昨年の10月 日、風の強い晩で

—百年の歴史を閉じる—

⑨ 山鉾石倉稲

したが、よく集まる仲間(昭和24年卒業・第三期生)だという十一人の方々でした。

札幌から山下信義・高野名弘・中西敏一郎・成田実三の三人に加えて、古平からは三浦正弘・立島修一・熊谷泰治・横野治・三浦慶子・金沢笑子・白浜ユリ

の八人で、会場は高野名弘の《別荘》でした。テーブルには立島氏の腕によりをかけた文字通りの山海の珍味が並べられていて、久しぶりのクラス会ということで、席は大変な盛り上がりようでした。

問題の「古平空襲」については、山下氏がさすがに職業柄(S・T・V技術部長をされて退職)、例の本からのコピーや資料を持って來られて、話を進めてくださいました。

■当時の目撃者が語る

昭和二十年七月十五日、当時、国民学校(小学校)の六年生だった。本校(浜町)では毎週、日曜日の朝は道路清掃の日なので、その日も清掃をしてい

たら、突然大きな爆音とともに、港町の山の上から(浜町ら見て)低空で海の方へ飛んで行く飛行機が見えた。時間は、道路清掃をしていたので多分六時半頃と思われるし、機数は三機と思っていたら、六機では?という人もいます。前日から、北海道の各地で空襲があつたが、この時は「空襲警報」はもちろん「警戒警報」すら出ていなかった。

それで、飛行機を見た人の中には日本の飛行機だと思つて、「万歳!」を叫んだ人もいたが、爆音が違う、はっきり米軍機のマークも見えたので、それからが大変な騒ぎになった。

それから間もなく、小樽の方から射撃音が響いてきた。

米軍機が去つて三十分程も経つた頃、今度はセタカミイから丸山の方に飛びながら、港内で鉾石の積み込みをしていた射水丸に向かつて銃爆撃を始め、大きな水柱が見えた(沖村から成田氏)。その後、港町の山の上方向からも攻撃をしたが、機銃の音がすこかった。乗員の顔が見える程の低空から攻撃し、射

水丸は簡単に沈んでしまったようである。

米軍機が攻撃していた時間はずいぶん長いようだったが、十分ぐらいかも知れない。

空襲の最中、町の人たちの対応はいろいろだった。

防空壕らしいものに隠れる人や、裏山へ走る人、家の中でふとんをかぶっていたという人、縁の下にもぐった人もいた。家族が「早く隠れろ!」という「どうせ死ぬんなら、見ていて死にたい」などと言つた人もいたという。しかし、ふとんをかぶっていたという人が多かったそうである。

この日は、近くの積丹・来岸村、岩内・雷電沖でも汽船が撃沈され、死傷者が出ている。

※山下氏からの指摘で、射水丸の「射水」は、山形県ではなく富山県「射水郡」でした。

また、アメリカ領事館と連絡をとつて、古平空襲に関する米軍公文書による調査についても手続きをしていたが、米空軍にはその資料が無いという返事が來ました。

←(次ページ下段へ続く)

遙かなる故郷の思い出

[28]

『闇屋』の話

[上]

橘

義我

春

今から五十年近くも前の話なので、もう時効になろうかと思うが、その頃は「闇屋」といわれるような商売があった。現在は、飽食の時代、なので、闇屋などという商売は成り立たないだろうが、その闇屋なるものの運んで来る食糧で、どうやら生きていた人たちが沢山いたことは事実だった。

敗戦で復員してみると、世の中はガラリと、すっかり変わって果てていた。何しろ生活物資が何にもない。特に主食になる食糧は細々とした配給で、小麦粉やとうきびの粉などは上等の方だった。

ある時、主食の米の代わりに砂糖（さらめ）が配給になったことがあった。私の家は、その頃九人家族だったので、三週間分だということ、さらめが石油缶でドーンと三つもきた時には——こりゃ、おどろいたネ。

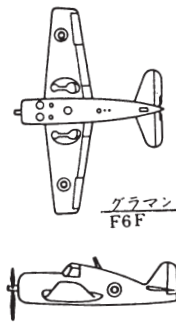
ご飯の代わりにザラメをなめて三週間生きていろ！ というわけだからネ。冗談じゃないよ。たしかにザラメを三週間なめていたら、そりゃー死ぬことはないかも知れないが、腹ペコでいったいどうやって働けというのだ、「この糞つたれ！」と腹がたつたが、とどのつまりはザラメをやミ屋に売って、その金で、ヤミ屋からヤミ米を買って食う……まあ、こんな生活であった。

当時は、ほとんどの物資が政府によって統制されていた。本来なら、物資を決められた値段以上で売った者も買った者も、法律で罰せられるはずだが、なにせ一億の国民がヤミ屋とつながっていて、多くの人たちは、そのヤミ屋の食糧で飢えをしのいでいたようなものであった。それを違反だといって、みんなをひっ捕らえていたら、日本国中のブタ箱や刑務所は満員の盛

（前ページより続く）

二十一人も亡くなった古平空襲も、戦争というものから見たときは、記録にも残らないような小さい出来事だったのです。

ところでクラス会の方は、いつの間にか夜が明けたのに驚いてひと休み、その後、積丹観光をし、古平温泉で疲労回復、みなさん、元氣いっぱい札幌に帰られた——とのことです。



ドイツ機 F6F

況になつてしまつたろう。配給の食糧だけでは、とてもではないが生きていけない時代であった。おそらく、家族全員が餓死することになる。

ある時新聞が、「裁判所の山口判事は誠に清廉潔白な人で、世の中の悪を正す身であるがためヤミで入手する食糧を一切こばみ、配給される食糧だけで生活し、ついに栄養失調で亡くなられた。」という、悲しい話まで報じていた。

※（次ページ下段より続く）

あり、周辺町村が共に栄える町づくりを行政に期待したい。もうひとつの重大な問題は泊原発のことである。原発の避難道路としてもその完成が急がれたといわれるが、今となつては原発の技術を信頼するより外に策はない。

しかし、最近、三号機増設の話があり、絶対反対の声が大きく上がりそうである。北電では安全といっているが、周辺住民の不安は隠し切れないものがある。泊村住民のひとりの「死なばもとも——」の声が不気味である。

過疎化地域町村の生きる道は険しい模索が続くようある。

今年は、春から秋にかけて積丹半島へ押し寄せる車の多いことが予想され、排気ガス、ごみなど、車公害の心配、そして、原発の行く末を憂えている毎日である。

◆
当時は、食糧が無い——と言いながら、ヤミ値なら何でも手に入るといふ不思議な世の中だったのである。（つづく）

—懐かしいおやつ—

《歯固め》



竹内 コト

昔—戦前のことは、もう昔の話になってしまいました。

その頃、古平町内には病院が二軒から三軒、歯医者さんも二軒はありましたが、今のように簡単に治療にも行けませんでしたから、みんな生活の中で、健康にはずいぶんと気をつかっていましたし、また、それが生活習慣にもなっていました。

鯨場の仕事が忙しくなると、いろいろな駄菓子振るまわれもますが、なかでも忘れられないお菓子？ があります。

それは、どこのお菓子屋さんでも売っていないもので、それぞれの家庭でよく作ります。時期はだいたい五、六月の頃のようにです。「歯固め」といって、材料はご飯釜についたおこげ、お正月のまゆ玉の餅の干したものの、それに大豆などです。鯨場の番屋では大きな釜でご飯を炊くので、おこげもたくさんでき

ますし、ご飯の残ることもあります。すると、炊事の人はそれを干しておくのです。漁期の間にはたくさんたまりますから、働いている人たちがよく貰ってきます。

作り方は、それらの材料を油をひいた鉄鍋の中に入れて炒ります。いったん鍋からあげてお

『過疎化の中半島一周 道路完成と泊原発を考える』

北 政 道

昨年の十一月一日、積丹一周道路の完成を待っていたかのように、連休でもあったが、この沿線は車の渋滞で長蛇の列であった。バス・タクシーも巻き込まれ、救急車がかろうじて走り抜けた状態で、まさに車社会の縮図さながらの様相であった。

いて、今度は鍋に黒砂糖を入れて、砂糖みつを作ります。水あめを入れるとつやが出て、それに味も一段とよくなります。それにさっきの材料を入れて手早くかき混ぜ、ぜんたいにみつをからませます。火から下ろして、冷めないうちに、子供のげんこつ程に手でまるめます。

私の家では、それを木の折に入れておいて、冷えてから子供たちにおやつとしてくれるのです。学校から帰って来て食べるのが楽しみでした。

固い、歯ごたえのあるもので

神恵内村赤石の友人からの電話では、村始まって以来という交通量の多さに驚き、道路を渡ることも出来ず、この先、事故の起ることが心配で、信号機も無いので困り果てているとのことであった。住民無視の感があり、道路幅も狭いことから、拡

したが、昔の人はこうゆうようなものをおやつとして、かむことで歯を丈夫にしていたのかも知れません。

また、親にしても子供が多くなりましたから、こうしてちょっと工夫しては食べさせていたのです。

私の子供の頃は両親が鯨番屋で働いていましたから、この「歯固め」の材料にするものはたくさんあったようでした。

時の流れは生活をすっかり変えてしまい、

今、あの甘く香ばしい匂いが懐かしく思い出されます。



張工事も進むことになりそうである。これからの冬季節間は交通量も減ると思うが、生活していく上での問題も多い。観光地で見られる空き缶やごみのポイ捨てなど、日本人のマナーの悪さが大いに気になる。

便利な車だが、一面、走る凶器でもあり、地元住民から見ると多少の不安を抱えることでも

※→(前ページ下段へ続く)

鴨居木神社

正隆寺の僧侶だった原田養善が奉祀していた大山祇神（オヤマズ（ツ）ミノカミ）を大正九年、依田七五郎らが発起人になり、部落民の手で鴨居木神社を創建した。

大正十二年、道路から五十メートル程鴨居木川の上流に上った

小高い丘の上の現在地に社を移築し、

それからこの日、八月二十四日を例祭日とした。

昭和三十七年、現在の神社（間口五・四メートル、奥行九・九メートル）に改築した。神社の周辺はよく整備された草地で、階段を上って行く社殿の周囲には立ち木

—5—



古平美術協会

渡辺喜嘉之

があり、閑静で、俗界と離れた雰囲気がある。

社殿は当初、公園部落の集会所として使われたこともあったが、その後は氏子も減り、現在は、例祭日に部落民が集まり、神官を呼んでご祈禱をし会食をするだけで、そのほかの神事は特に行われていない。

また新しい年がやって来た。子供の頃なら、お正月とは楽しいものであり、事実、楽しい思い出ばかり残っている。だが八十近くにもなると、なぜか三百六十五日が早く、あつという間である。

昔は、各家庭には囲炉裏というものがあつて、年の暮れともなると、必ず炉端に敷いてある炉砂（ろずな）という細かい小

囲炉裏で焼く

さかなの香り

石）を取り替える。家ではそれが私の仕事だったので、前浜まで行って、バケツいっぱい的小石を取ってそりで運んで来た記憶がある。

大きな鰯を木のくしに刺して、その小石を敷いた囲炉裏端で焼く。どこの家でも魚は木のくしで焼き、鰯などはこんがり

と焼ける程おいしかった。年寄りには、こんな歌を子供たち

にうたうたって聞かせながら、魚の焼き加減を見ていた。

とつくり返して焼アーいでしょうゆつコつけで
アンム アンム アンム
浜育ちでないとわからないと思うが、郷愁をさそうなんとも懐かしい歌である。
子供たちも魚を焼くのを見ていて、これアカガレイ、これクロガシラ、これはイシモチなどと、鰯の種類もいつの間にか覚えるようだ。

福井 幸平

昔は、鰯の仲間でもヒラメとか、テックイのほかは安かったし、われわれ貧しきものの食べ物だったのかも知れない。もつとも昭和の初め頃は、鰯が獲れ過ぎると魚粕にしたそうである。今では、鰯といえば高級魚になつてしまった。

いずれにしても木のくしで焼く鰯・鰯は、忘れることのできない味覚である。



俳句



古平ホトトギス会

仲谷 美砂

冬涛に触れつ高舞ふ海猫の群

ブラジルの声はずみくる初電話

福井久美子

誰か羽織る手編みショールの石仏

石仏ショール羽織りし微笑かな

木村 芳園

盆踊り見ているちに引き込まれ

観楓会肉焼く煙けむりの中にな

仲谷比呂子

初羊蹄車窓に拝み過ぎにけり

漁港まで切れ間の無かり蟬の声

水見 句丈

測量機負ひ藪抜けし顔の汗

卒寿おひてふ齡い過ぎしや年の暮

斉藤 波留

八十路なお余生をつなぐ寒かん卵たまご

積丹の海苔めば目秤めかりで買い求め

大島 喜恵

新若布匂ふ裏町通りけり

娘を看取る吾れも老いけり春寒し

山口 浪

寝る刻の沖に烏賊火の集まれる

冬ごもり会話なき日もありにけり

岩瀬 実

新車にも^い飾りして孫帰る
まゆ玉を飾り孫等を迎えけり

大和田 絵伊

船住まい漁夫に搗き餅送りけり
顔見世の誘いであればすぐに乗り

越野 敏雄

慣わしの冬至南瓜の夕餉粥
冬至とは南瓜粥食うきまりかな

越野 清治

潮引いて海苔掻き日和忙しや
大通り吹雪ける中の魚売り

越野 スミ子

金閣寺逆さ映ゆる日永かな
水澄めり逆さ写れる金閣寺

福井 幸平

闘病の妹^{いも}を励ます初詣
初詣妹^{いも}の身代わりなりしかな

川 柳

渡辺 ハツエ

コップ酒なみなみつがれ口の出る
素寒貧^{すかんびん}達者なだけが取り柄かも

石井 愛子

人生という輪の中に老夫婦
孫と呼ぶこんな幸せ祖母にくれ



在りし日の

亡夫としのんで

渡辺 ハツエ

リヤカーのお世話になって数
十年、その間、私たち夫婦と一
心同体となって活躍してくれた
愛車です。

私の行くところ常にリヤカー
ありで、ずいぶんと運動もさせ
てもらいました。主人と、二台
のリヤカーを利用していた時に
は、二丁トラク並みの働きを
していたのでは、と思える程よ
く働いてくれました。

主人が出漁した日には、帰港
する時間を見計らってリヤカー
を引いて港へ行きます。帰港の
遅い時などは、「もしかしたら
事故でも起きたのでは……」と
心配したり、魚市場のセリ時間
に間に合わないのではとハラハ
ラしながらも、私はいつもリヤ
カーに腰をかけて沖を眺めなが
ら、帰港の遅い主人を待ってい
たものでした。

待つことしばし、舟は事故も
なく、セリ時間にも間に合っ

港に入ってきます。早速、漁獲
してきたタコをリヤカーで市場
へ運びます。大漁、不漁はとも
かくとしてまずは一件落着。

そして漁具類をリヤカーに積
んで家へ帰ります。そのあと、
孫たちをリヤカーに乗せて遊ば
せ、相好を崩していた主人、い
ろいろの思いが脳裏をよぎりま
す。

家業であった漁業をやめるこ
とになり、リヤカー必要でなく
なり、もとは弟から貰ったもの
だったので一台は返すことにし
ました。リヤカーは、弟の自転
車の荷台にくくりつけられ帰っ
て行きました。「長い間、ほん
とうにご苦労さんでした。」と
、声をかけて見送りました。

振り返ってみると、主人が病
で倒れる十数日前の出漁した朝
はとてもよい風でした。操業を
終えて帰港する頃になって南西
の風が吹き出し、その上雨もま

じり、帰港には向かい風、私は
心配になってきました。

わが家の「健生丸」は〇・五丁
の小舟です。大型のポンポン船
は次々と帰って来て、タコの荷
揚げをしています。さあ大変、

私はリヤカーに腰をかけて沖を
眺める——なんて悠長なことは
していられなくなりました。風
はますます強くなり、雨も大降
りになって、海も白波がたつて
います。私は、防波堤の上にあ
がったり下りたりと、気が落ち
つきません。困った時の神だの
み、神仏にもお助けをと思いま
した。

どれ程の時間が経ったのでし
ようか。

「あつ帰って来た！」
私は思わず叫びました。今しも
灯台をかわした小舟が見えたの
です。緑色の雨合羽(あまがき)を

着て、船外機の舵をしつかりと
握っている主人の姿——、私だ
けが見た感激の瞬間でした。私
は主人の労苦を心からねぎらっ
たのでした。

明治四十四年三月十六日、古
平町に生まれ、その古平町を故
郷として八十五年三月。漁師
になって六十余年間海を愛し、
自分の職業に誇りをもって生き
てきた漁師人生でした。この朝
の出漁は、主人にとつては生涯
の檣舞台であった、とは私の感
傷でしょうか。

木の葉の如と思う小舟
この朝も波荒き海に
夫出でゆきぬ



北海タイムス歌壇・柳壇に揃って入選

目の手術受けて波の間に見ゆるローソク岩
ああ古里は美しきかな 石井愛子
亡き夫の使いこなせし漁具なべて 渡辺ハツエ
思い出と共に納屋におさまる 北政道
愚痴言わぬ妻の強さが怖くなり